岩倉使節団とフランス―明治の日本人に見えなかったもの―

市川慎一

はじめに

わたしは同じタイトルに副題として「明治の日本人がヨーロッパで見たもの」をつけて、フランス語で小論を発表したことがある(1)。そのため、当初、本小論を「フランスで見えたもの」と「フランスで見えなかったもの」と二つにわけて論じる予定であったが、紙幅の関係でここでは「見えなかったもの」のみを取り上げてみたい。

岩倉使節団とフランス陸軍

岩倉具視使節団のフランス側との会見で団長が、次のように述べたと雑誌『両世界評論』の記事「タイクン政府の腐止以降の日本」で報じられている。

「ミカドの外務大臣[=岩倉具視]は、ドイツとの敗北後、われわれの代表にこのように語った。「われわれは戦争がフランスに課した不幸を存じておりますが、このことはフランス陸軍の長所にかんするわれわれの見解をなんら変更するものではありません。仏陸軍は数に勝る敵軍にたいしてあれほどの勇気をしめされたのですから。」(2)

『ジュルナル・ユニヴェルセル紙』も一八七三年三月二十九日づけで、次のように報じた。

「特命全権使節団の派遣は、実行に移されたばかりの一連の諸改革の発端にすぎない。[中略]周知のように、日本陸軍はフランスの士官からなる軍事顧問団の助力で完全に再編成されたのである[後略]」。(3)

岩倉使節団にかんするあまたの研究書では、指摘されてきたことであるが、その主たる目的は、1) 幕末に締結されたヨーロッパ列強との「不平等条約」の改定(とりわけ、治外法権の撤廃)、2) 欧米先進国での実情視察であったのはいまさらここで贅言におよぶまでもない。

だが、先の二つの引用文でも明らかのように、普仏戦争でのフランスの敗北にかかわらず、岩倉具視がその陸軍の長所をほめたたえていることも、未来の日本陸軍がフランス式でその時点では、再編成されつつあった、とフランス新聞で取り上げられたのも事実であった。

フランス軍事顧問団は、幕末の初回から数えて計三度も来日したのであるが、わたしはこれについても他誌で小論を発表している(4)ので、ここではごく単純化してふれておきたい。第一次顧問団は、一八六七年に来日したが、幕府の崩壊で翌年、解消になった。次いで、フランスの普仏戦争での敗退にもかかわらず、第二次顧問団は、一八七二年(明治五)に派遣され、一八七六年(明治九)まで帝国陸軍の再編成にかかわった。最後の第三次顧

問団は、一八八四年(明治十三)から一八八九年(明治二十二)まで滞日し、日本陸軍の近代化に貢献した。

このように、ヨーロッパ列強との不平等条約改定や米欧先進国の実情視察もさることながら、使節団の中にはわが国における陸軍の近代化をフランス陸軍をモデルに研究する団員が含まれていたということも想像に難くない。その一人に、日本出発時には軍人ナポレオンの熱烈な崇拝者だったが、滞仏以降、ナポレオン法典の法学者に転身した山田顕義の例がある。

パリ・コミューン鎮圧後の惨状と普仏戦争の裏面 ―大仏次郎『パリ燃ゆ』を再読して ―

はじめに、久米邦武が編んだ『特命全権大使　米欧回覧実記』(5)から普仏戦争とパリ・コミューンにかんする叙述を抜き出してみよう。

久米邦武は、普仏戦争におけるプロイセン軍とフランス軍の兵士の優劣を論じた個所で次のように指摘した。

「先年の普仏戦争でフランスは兵士は勇敢だったが士官の能力が劣っていたので破れ、プロイセン軍は士官の規律がすぐれていたために勝ったと言われる[...]。両軍が相迫って戦うと白兵戦になるが、この時は銃剣が最も大きな力を発揮した。メッツの激戦に際して両軍の死傷者は無数だったが、とくにプロイセン兵の戦死者の多くは銃剣によるものであったという。」一八七三年(明治六)一月十五日(6)。

使節団が視察したフランスの現実の中で、普仏戦争後におこったパリ・コミューンの賊徒が遺した爪痕にふれ、久米は、次のようにも述べている。

「先年のコミューンの反乱の際、賊が乱暴して小銃を発射し、その弾丸で砕かれて廃物となった望遠鏡が壁にかけてあった。あの戦乱においては、プロイセン軍による破壊よりもコミューン一党による破壊の方がよほど激しかったのである。」一八七三年(明治六)一月二十二日(7)。

久米がいみじくも指摘したように、フランスの兵士は、勇敢だったが、独仏軍の士官に能力の差があったというのは、おおむね史実に合致しているように思われる。というのも H.ルフェーヴルが言うように、「ボナパルティスムの名誉のまとである軍隊は、またその弱点でもある。軍隊はボナパルティスムを支え、またそれを傷つけられやすいものとする。ボナパルティスムが崩壊するのは、軍隊によってであり、また軍隊とともにである」(8)からである。

その頼みの軍隊は、普仏戦争ではシャロンでの作戦を任されたマクマオン元帥にも、メッツに駐留したバゼーヌ将軍にもプロシア軍にたいする戦意が欠如していて、ナポレオン三世がスダンで降服し、独軍の捕虜になったとの報に接すると、フランス政府の頂点を目指すルイ=アドルフ・ティエール(一七九七 – 一八七七)も早々と「皇帝を見捨てたバゼーヌと同じく」、ナポレオン三世を見捨てたのである。これでは普仏戦争でのフランスの勝利は望むべくもなかった。

さらには、このような経緯の中で、明治の日本人にはティエールをはじめヴェルサーユ政府首脳が、フランスの北部を占領中のビスマルクらに支援を求めていた点などは慮外の事態だったにちがいない。

この点は、現在の日本人にも普仏戦争の一番分かりにくい部分なので、具体的にふれてみたい。

ナポレオン三世が権謀術数のビスマルク(一八一五-一八九八)の罠にはまり、普仏戦争(一八七〇年開始)に敗れ、スダンでプロシア軍の捕虜となったとは、よく言われることである。この戦争に備え、プロシアの鉄血宰相は、かなり前から用意周到な準備をして戦闘に臨んだのだった。普仏戦争にかけるビスマルクの意気込みについて、大仏次郎は、このように指摘した。

「ビスマルクは、フランスに対する戦争を準備していた。大使としてパリで暮してナポレオン三世の人間を知っているし、プロシアがヨーロッパに覇をとなえる為には、どうしても一度、フランスを叩きつけるのが必要なのを固く信じている。普墺戦役の時、ビスマルクは既にこれを言明した。「我々の国家的発展の途中にフランスとの戦争は避け難い。内政にも外交にも、今日からこれを忘れず準備すべきだ。参謀総長モルトケ将軍は二年以前からフランスとの戦争は早期に始めるほどよいとの意見書を出してあった。彼らには戦争をもてあそぶ余裕が在った。」(9)

これに対して、その直前のメキシコ介入戦争では、「大帝[=ナポレオン一世]の猿真似を仕損ねてメキシコ遠征で馬脚を現わして」(村上光彦氏)、ナポレオン三世は、多大の戦費と兵力を消耗し、フランス経済を逼迫させただけだった。その間、皇帝はプロシアにたいして、ほとんど戦争の準備をすることなく、普仏戦争に参戦し、敗北し、自ら第二帝政にピリオドを打つかたちなったのである。

ところで、普仏戦争の講和も正式に終結しなかった段階で、プロシア軍のパリ包囲による長期にわたる籠城を理由に早く休戦にもちこみたいティエール(内閣組閣は一八七一年二月十九日)のヴェルサーユ政府の政策に反発し、パリの一部市民が、自治政府を目指して、一八七一年三月十八日に、いわゆるパリ・コミューンを宣言した。

これはヴェルサーユ政府にたいしてパリの一部市民が蜂起したのだから、本来ならフランスの内戦だったのだが、パリ・コミューンの反乱を鎮圧するため、ティエールや時の外相ファーヴルは、なんと敵側のビスマルクらの助力をあてにするという、奇妙な手段にうってでたのだ。コミューン中央委員会は、「ドイツ軍に対して何らの攻撃態度をとるものではない」と明言しているにも関わらず、アンリ・ルフェーヴルが指摘するように、「ドイツ軍はかなり忠実に中立という公式の態度を守っていた。だが、それはコミューンを粉砕するために、ビスマルクがティエールに兵士[=ドイツ軍の捕虜となったフランス兵]を返還することを妨げるものではなかった。ドイツの首相は、すでに弱体化し敗北したフラン

スにおいて内戦が勃発し、それが憂慮すべき運動の敗北によって終るのを見ることは喜ばしい限りであった」(10).

老獪なビスマルクは、パリを震源地とする「叛乱の毒素」、つまり、パリ・コミューンの宣言は、フランス革命(一七八九年)の亡霊を彼にふたたび想起させるからであった。これは、十八世紀を通じて、ヴォルテール、ディドロ、ダランベールといったフランスの啓蒙思想家に対して好意的ジェスチャーをしめし続けたロシアの女帝エカテリーナ二世についても同じことが言えるだろう。というのもフランス革命が起こるやいなや女帝は、一転してアンチ・ヴォルテール主義者に豹変して、ヴォルテールの著作をすべて焼却処分したと言われている。作家大仏次郎は、このあたりの状況をこのように描写する。

「[...]これまでもパリに起った革命が、一度ならず、その後も繰返して近隣の国々に革命的波動を送って動揺を生んだ。現にパリは、諸国の共和主義革命運動の亡命者を迎え入れて、叛乱のプールとなっている。政治的亡命者が安全で生活出来る場所である。

フランスがここで赤化し、人民政府を樹てるような事態に入る。怖るべき革命伝染病の病巣となり、亡命者を活発に働かせ、容易に叛乱の毒素を国々に伝えるのである。ビスマルクの読みは深く深いものであった。十月三十一日のパリの一事件が一夜で制圧されたとしても、将来が考えられた。

それまでしてパリの民衆が休戦反対の意志を示しただけでも無視出来ぬことである。

「これはいけない」

と、彼は言った。

ビスマルクの脳裏にはカイザー(ヴィルヘルム一世)の存在をも脅かす兆候でも過ったのであろうか。

これに対して、ヴェルサーユ政府も、パリ民衆の鎮圧にプロシア側からの支援をあてにしていたとのだから妙ななれ合いだった。「ティエ―ルは、いざとなれば、昨日の敵のドイツ軍の首脳部、ビスマルクやモルトケから支援を受けられることを確信していた」とも大仏は書いている。

なお、時の大統領ティエ―ルついて、「今度のプロイセン軍による攻撃の際、防衛政府を組織するにあって大統領に選ばれたのである。昨年春、プロイセンと講和し、その軍を撤退させて償金を払うことを決め、さらにパリ・コミューンを鎮定するなど、国家の危機に対して力を尽くした」(11)と久米は紹介しているだけではなく、岩倉使節団は一八七三年(明治六年)のヴェルサーユでの新年祝賀会に招かれた、と記している（明治六年一月一日)。久米は「ヴェルサーユ市はパリの西北にあり、汽車で一時間足らずである」(12)とさりげなく書いているが、パリ・コミューンの反乱軍が鎮圧された(一八七三年五月二十八日)とはいえ、反政府感情の強いパリ民衆を恐れるあまり、この期におよんでもティエ―ル以

下の政府首脳はパリには容易に近づくことができなかったのは日本の使節団には想定外だったにちがいない。

ところで、パリ・コミューンを動かしたのは、プルードンとブランキの思想だったという大仏次郎の主張は全巻を通して一貫しているが、前者の思想については、その著『財産とはなにか』から二度「財産とは盗んだもの」を引用し、説明しているにすぎず、後者についてはその思想のなんたるには全くふれられていない。大部な著作の中で、ブランキは、まるで影絵のように登場するにすぎないけれども、この力作の最後は、ブランキのクレマンソーあての書簡で締めくくられている。

著者がパリ・コミューンの思想的バックボーンにあえて踏み込まなかったのは、マルクス『フランスの内乱』やエンゲルス『空想から科学へ』によって、彼らの依って立つ理論を十分に分析されているとして、それ以上に立ちいる必要なしと考えていたからだろうか。

フランス流の共和政思想をめぐって

かつてテレビ番組 ETV「司馬遼太郎・雑談　”昭和”への道」で、いまは亡き司馬は「明治七-　八年[一八七四-　一八七五]ごろ、日本で湧きあがったフランス流の民権思想は過激にみえた」と説明されたが、岩倉使節団はナポレオン三世のフランスが普仏戦争でプロシアに敗れた直後のヨーロッパを視察し、生々しい戦禍の惨状をパリで目の当たりにした。ヴェルサーユ政府側の説明のあるがままに、一行はフランス流の共和政思想がもたらした惨禍に立ち会わされたかたちなったのだった。

ところで、明治時代から日本語では民権思想の語が親しみやすいが、それと同義の共和政思想というのは、ひとことでいえば国家に君主は不必要とする急進的政治思想と置き換えた方がわかりやすいかもしれない。つまり、ヨーロッパではフランス革命の仕上げにルイ十六世を処刑するにいたった過激思想をもっぱら指すから、産声をあげたばかりの明治政府はその頂点に明治帝をいただいているために、わが国の為政者たちが共和政思想を極度に恐れたのも無理がなかったといえよう。

岩倉具視一行がベルリンで会見した鉄血宰相ビスマルクやプロシア軍の参謀総長モルトケもパリ・コミューンがおこった時にはフランスに滞在中であり、ヨーロッパ諸国へのこの危険な病根の伝播を食い止めようとやっきになっていたこともあり、反パリ・コミューンのヴェルサーユ政府のティエ―ルや外相ファーヴルの要請に積極的に協力したほどだった。すなわち、ビスマルクから特別許可をうけ、普仏戦争中、プロシア軍の捕虜となっていたフランス兵十七万人をパリ・コミューン軍の撲滅のため、ヴェルサーユ軍に合流させたのだった。大半が志願兵から構成されていたコミュナール連盟軍に対して、実戦の経験をつむ十七万のフランス兵がヴェルサーユ側に加わったから、戦闘はヴェルサーユ側が俄然優勢となったのはいうまでもなかった。

わたしはパリ滞在中になんどかペール・ラシェ―ズ墓地を訪れているが、コミュ

ーン兵の残党が最後には、墓地の奥、いわゆる「連盟兵の壁」まで追いつめられ、皆殺しにされる悲惨な最期をむかえたという一点がよく呑み込めなかった。つまり、なぜそれ以外に生き延びる方法がなかったか、というのがわたしの素朴な疑問だった。ヴェルサーユ政府にプロシア軍の協力があったというのであれば、この疑問は氷解する。大仏は、次のように指摘する。

「彼らは市の場末の、城壁まで追詰められていた。その時、背後の郊外を保障占領中のドイツ軍が、パリから出て来るあらゆる道路をバリケエドで塞ぎ、北鉄道を占領し、サン・ド二運河左岸にドイツ軍隊を入れて、ほかに五千名の兵力で、コミューン側に残った唯一の城塞ヴァンセンヌを郊外に孤立せしめた。」

おわりに

思うに、戦争というのは、国益を異にする場合、国家間で衝突がおこり、戦争に突入するのはいうまでもない。独仏両国は人種的にも、文化的にも異なる歴史を歩んできているが、隣国同士のドイツ人とフランス人は、過去において渡仏する前のわたしが想像していたほどたがいにいがみあっていたのであろうか。

具体的な例をあげてみよう。普仏戦争でフランスが敗れた結果、ドイツに割譲されたアルザス・ロレーヌの人たちの中に、自らの国籍の選択を迫られた人々がいた。実例では、第二次フランス軍事顧問団の一員として来日し、二年間滞日した(一八七六一八七八)アルザス出のフランス人、ルイ・クライトマン(一八五一・一九一四)のケースがある。クライトマン兄弟はともにフランス国籍を選び、フランスの秀才校のひとつ理工科学校に進学したが、反対に、両親はドイツ国籍を選択したという。日本的に考えると一家離散の悲劇ととられがちになりそうだが、果して当人たちにはそのような意識があったのだろうか。

同様に、わが国では、アルフォンス・ドーデの『最後の授業』は、普仏戦争に敗れた結果、フランスはアルザス=ロレーヌを失うばかりか、フランス語という母語をも失う危機に見舞われるという愛国的なコンテクストでとかく解釈されがちである。ところがアルザスがおかれてきた歴史的な経緯からはわが国で考えるほど大きな言語的・文化的問題を惹起させた大問題ともわたしには思われない。というのは現在でもアルザスの人々の大半は、フランス語とドイツ語のバイリンガルだからであり、わたしが滞在した当時の現地では、公共のバス等の注意書きはフランス語とドイツ語が併記されていたからである。

わが国での外国文学の授業は、伝統的にタテ割りで行われてきたので、ドイツ精神とフランス精神は、水と油のように相反するものの如く論じられがちであるが、国境を接することの多いヨーロッパ諸国の間では日本で力説されてきたような国家間に政治的対立関係がつねにあるのかどうかをわたしは疑わしいと思うようになっている。

大仏次郎『パリ燃ゆ』では、パリという一都市における市民の蜂起の一部始終が取り上げられるが、当時、普仏戦争がまだ終結せず、フランスの一部を占領していたプロ

シア軍の支援のおかげで、ティエールのヴェルサーユ政府はかろうじて連盟軍を撲滅するにいたるのであるが、大著をライフワークとした大仏は、主人公は掲げるコミューンの理想社会を実現できずに命を落とした「無名の人々」であるとし、終始彼らをあたたかい眼差しで見つめている点も強調しておきたい。
(Tokyo, le 22 septembre　– le 20 octobre2011).

注

1) ICHIKAWA Shin-ichi, ≪La Mission Iwakura(1871-1873) et la France—cequevirent en Europe les Japonais de l'époque Meiji—≫早稲田大学地中海研究所紀要 第4号 2006年3月。pp.119-129.

2) *Revue des Deux Mondes*. Mars –Avril.1873., p.479.

3)*L'Illustration / Journal Universelle* du 29 mars 1873. p.206.

4) Shin-ichi ICHIKAWA, ≪Les premières Missions militairesfrançaisesvues par les Japonais de l'époque Meiji≫dans*Revue Historiques des Armées. Mélanges.* No.224. Septembre 2001. pp.55-64.

5) 現代語訳　久米邦武編著「特命全権大使　米欧回覧実記」訳注水澤周　企画米欧回覧の会(慶応義塾大学出版会、2005年刊)。t.3. –p.29.[以下、現代語訳久米邦武と略記]。

6)同上。p.101.

7)同上。p.149.

8) H. ルフェーヴル著　河野健二　柴田朝子　西川長夫訳『パリ・コミューン』(上下)（岩波文庫、2011年)。（上) p.188.

9) 大仏次郎『パリ燃ゆ』からの引用・言及はすべて『ノンフィクション全集』(全5巻中の『パリ燃ゆ』は、t.3., t.4., t.5.）（朝日新聞社、1971年）によるが、煩瑣をさけるため、あえて巻数とページ数はしめさなかった。

10)　H. ルフェーヴル著前掲邦訳。（下）p.176.　*Cf.*　前掲邦訳の(下)p.353.でも「ティエールの持ち札のなかに、ドイツ軍という強力なカードがあった」とある。

11) 現代語訳久米邦武 t.3. - p.53。

12) 同上。t.3. - p.55.